

# われなくも

## ■ 楽曲データ

歌詞：伝・親鸞聖人「御臨末の御書」

楽曲：大橋博 作曲

発表：相愛学園 1962年

初演：—

初出：『聖歌』 相愛学園 1962年

管理番号：M1648

## ■ 創作の経緯

詳細な経緯は不明。

## ■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第2巻収録

底資料：『聖歌』 相愛学園 1962年

校訂の詳細：特記事項なし

## ■ 解説

《われなくも》の歌詞は、親鸞聖人のご臨終間際のお言葉として伝えられる「御臨末の御書」からとられています。学術的には偽書とされるものの、その内容からは親鸞聖人をお慕いする人びとの思いをうかがうことができます。

散文体で書かれている部分（我が歳きわまりて～その一人は親鸞なり）では、親鸞聖人がいつも私たちとともにいてくださることを述べ、続く和歌は、阿弥陀さまのお慈悲は限りなく、おみのりが絶えることもない、と詠っています。

### ◆ 作曲者について

作曲は、大橋博（1923～1977）です。相愛女子大学（現・相愛大学）音楽学部の教授を務めた縁で、仏教讃歌の作曲・編曲に携わるようになりました。本山の降誕会で毎年つとめられる『宗祖降誕奉讃法要』（音楽法要）も、彼の作曲によるものです。

### ◆ 曲について

歌詞にならって、音楽も二部構成になっています。前半（1～36小節）は朗誦の抑揚にもとづいて作曲されています。この部分はソプラノの独唱で歌われます。ついで後半（37～45小節）は女声三部合唱です。親鸞聖人のお徳を讃えるにふさわしく、堂々として、歓びにあふれた明るい音楽です。

## ◆演奏のヒント

- ①美しく丁寧な発音を心がけましょう。特に、高めの音域に出てくる「あ」の母音は浅くなりやすいので、深く発音するようにしましょう。
- ②合唱部分のメゾソプラノとアルトは音の動きが少ないため、棒読みになりやすいので気をつけましょう。また、同じ音が続くと音程が悪くなりやすいので、一つひとつ音を取り直すような気持ちで歌いましょう。
- ③38・39小節目の「法は」は、「の」の八分音符を急がずに、テヌート（音符の長さを十分に保つこと）で歌うと、言葉のアクセントを活かすことができます。
- ⑤42・43小節目の「あ」は文節のはじまりの音なので、はっきり発音しましょう。
- ⑥42小節目から最後にかけて、長いクレッシェンド（だんだん強く）です。音量の配分をよく考えましょう。また、最後の小節は弱くせずに、フォルテのまま歌い切りましょう（ただし、乱暴にならないように）。

## ◆楽譜

解説執筆：山口篤子（本願寺仏教音楽・儀礼研究所 [現・浄土真宗本願寺派総合研究所仏教音楽・儀礼研究室] 研究助手）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 70（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第197号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.